

ICUにおける
ジェンダー・セクシュアリティ対応
—トランスジェンダー学生対応の10年間とこれから

**Transgender Students at ICU:
The Past Decade and Beyond**

[特別座談会]

ICUにおけるジェンダー・セクシュアリティ対応 —トランスジェンダー学生対応の10年間とこれから

国際基督教大学 (International Christian University: ICU) では、2003年度から性別違和のある学生の学籍簿上の氏名・性別表記が変更可能になっています。最初のケースから10年以上が経ついま、布柴達男先生 (学生部長)、相原みずほさん・土屋あい子先生 (人権相談員)、田中かず子先生 (元教員、最初のケースの対応経験者)、上田真央 (CGS助手、「LGBT学生ガイドinICU: TG/GID編」編集担当) で座談会を開催しました。

この冊子は、CGS Newsletter 017号に収録された記事のフルテキスト版となります。

[English Abstract] Transgender Students at ICU: The Past Decade and Beyond

Since 2003, transgender or gender non-conforming students at ICU have been able to change their name and gender on the university records. The following is an abridged transcript of a round-table discussion on this issue with Tatsuo Nunoshiba (Dean of Students), Mizuho Aihara (Human Rights Advisor), Aiko Tsuchiya (Human Rights Advisor), Kazuko Tanaka (former ICU professor, who assisted in the first case over 10 years ago), and Mao Ueda (CGS Research Institute Assistant and Editor of LGBT in ICU Student Guidebook (Transgender/ GID Edition)). Note that all names are indicated by initials below.

ICU's Human Rights Advisory Office and Gender Identity Issues

K.T.: I first realized the complexity of gender identity issues after a number of students approached me about their own doubts and struggles. I decided that it was really a matter for the Human Rights Committee because it concerns not only individual students but also the inherent problems of the cisgender-based gender binary social structure in general. Hearing about transgender issues first hand was an eye opener for me. Even now, I know that there is much I still don't understand.

M.A.: It's such a relief for me to hear you say that. In my early days as a Human Rights Advisor at ICU, this topic was really the most challenging for me to deal with. At first I was only able to give a standard response. But chatting with students and sharing information and experiences with CGS staff helped to heighten my awareness and understanding. I gradually realized how people could be hurt in ways that I might not be aware of. And I've started rejoicing with each new consultation, as yet another person comes to us for advice and support. I'm so grateful for the support we've received from CGS.

The Significance of the LGBT in ICU Student Guidebook

M.U.: As students, we would hear about gender and sexuality issues through the ICU grapevine, like the possible changes to personal student information and special consideration during our annual health checks. I thought it would make things easier for everyone if we could summarize all the information at hand, so we created a guidebook based on information from students and professors with relevant experience. Before submitting it, we weren't sure whether such basic information would be helpful, but ICU students and even students from other universities have given us positive feedback, saying it is a great reference for them. But one challenge was figuring out the processes and procedures and finding the relevant departments of the university.

T.N.: Changing students' personal information on the university records also relates to student health checks and physical education classes. I

think there needs to be more inter-departmental cooperation so that students don't need to go to so many different departments on their own.

M.A.: I was just talking to Professor Nunoshiba about how it would be a good idea to make a flowchart of the process after consulting with the relevant departments.

A.T.: The guidebook would be really helpful for faculty members as they come into contact with a wide range of students. So I hope that it will become more widely known on campus.

T.N.: It would be great if we could distribute them at faculty meetings as well.

Future Prospects

M.A.: Some of the students I've met as a Human Rights Advisor have told me that "I decided to come to ICU because it has this system [of changing students' personal information]." I think that it is definitely becoming a deciding factor for prospective students, especially since there are many students who will be turning 20 [the age of majority in Japan] or see college as a chance to start anew.

K.T.: Considering that it's been over 10 years since the first case, I do think that it's time for ICU to clarify its position on gender identity issues.

T.N.: At the same time, ICU needs to ensure that it provides facilities that live up to its position on these matters. Another professor remarked to me that it will "just require money." To which I responded, "it's actually much harder to change people's awareness, so it's easier for us if the problem can just be resolved with money!" (laughs) For example, I think we could try to resolve existing gender-related problems in the ICU dormitories where possible, and emphasize the diversity of each dormitory by highlighting their unique characteristics. That way people can choose a dormitory that suits them. I don't think a "one-size-fits-all dormitory" is feasible; instead, maybe we could offer a range of dormitories that come close to suiting different individuals.

K.T.: There have also been cases when a transgender student was not accepted to a dormitory, but we should really be able to deal with such cases with more flexible management in practice. I think it's important that we consider this properly in future.

T.N.: Yes, I agree. I've had some positive feedback from other Human Rights Committee members after I informed them of the recent interest from other universities in ICU's handling of gender identity issues. So I have great hopes that we'll be able to secure a transgender-friendly environment at ICU. I am committed to working toward this goal.

Yuji KATO (compiler) Office Coordinator, CGS

*This English abstract is taken from the CGS Newsletter 17th issue.

はじめに：2003年度以前のICUの流れ

加藤：ICUでは2003年度に初めて、トランスジェンダーの学生さんの学籍簿上の名前・性別の変更手続きが取られました。最初のケースから10年以上が経ちますので、これを機会に一度、関係者による座談会を開催し、これまでの流れを整理・共有して、これからのことを考えたい、と思い、今回皆さまをお招きした次第です。

今回の参加者は、2003年度の最初のケースに対応をし、2004年度にはCGSを立ち上げた、ICU元教員の田中かず子先生。現在学生部長で、人権委員会のメンバーでもある、布柴達男先生。現人権相談員で、学事部職員の相原みずほさんと、同じく相談員で数学科教員の土屋あい子先生。そして、「LGBT学生生活ガイド in ICU：TG/GID編」の編纂を担当したCGS研究所助手の上田真央です。司会進行は、CGS事務局の加藤悠二が務めます。

さて、座談会本編に入る前にまず、ICUにおけるジェンダー・セクシュアリティに関する流れを確認したいと思います。かず子先生が2003年度に初めてトランスジェンダーの学生さんの学籍簿変更手続きの対応をなさったわけですが、それは突然出てきたものではないと思うんですね。

この対応が始めるまでの前史として、学問の面においては、ジェンダー関連の科目が開講されていたこと——特に、「ジェンダーと聖書（現在は『ジェンダーの問題と聖書』）」「ジェンダー研究（現在は『日常生活とジェンダー』に改題）」といった科目が、一般教養科目としても開講されていたことは、大学がジェンダー・セクシュアリティの問題について関心を寄せていることを示す、大きな要素だったと思います。

また、ICUにおいて「人権」というコンセプトは大きな柱になっていますが、人権委員会が設定されていたことや、1997年に制定されたセクシュアル・ハラスメント防止規程に、「性的指向」に基づく差別発言もセクハラにあたる、と、90年代の段階から明記されていたことは、画期的なことです。¹セクシュアル・マイノリティへの支援が必要である、

¹ 国際基督教大学人権侵害防止対策基本方針には、「ICUは世界人権宣言を重んじる大学として、人権侵害のない教育・研究・就労環境を整え、構成員が安心して過ごせるキャンパスを確保する責任があると考えています。ゆえに、性、人種、宗教、年齢、性的指向、障がいなどに基づく差別や、地位・立場を利用したあらゆるハラスメントは形態の如何に関わらず許されません。本学の構成員はみな献学の精神である国際性やキリスト教精神を十分理解し、快適なキャンパスをともに作っていくことが要請されます。」と記載されている(2014.8.19. <http://www.icu.ac.jp/about/activities/humanrights.html>)。

と大学が考えてきていることが伺われます。

そして、学問、人権に加えて、授業以外の場面でもセクシュアリティについて語る場が、学内において持たれてきたことも重要だと思います。1990年代中頃から、かず子先生が学生さんと共に個人的に立ち上げた「セクシュアリティを考える会」が開催されていました。また、かず子先生の研究室はセクシュアル・マイノリティの学生さんのたまり場になっており、そこから当事者交流サークルが立ち上がった、ということもあったそうです。

こういった歴史的な経緯もあったうえで、2003年度に初めての学籍簿変更手続きが行われることになった、ということだと思のですが…

最初のケース

田中：2003年度の前にも何人か、LGBTのLGBだけでなく、T、トランスジェンダー、性別違和があるという学生たち2,3人に話をしてもらった機会があったんです。授業のあとに黒板を消していると「ちょっと聞いてください」とやってくるのがあって、話を聞くなかで「いままで私はLGBのところ＝性的指向については考えていたけれど、Tのところ＝性自認について、っていうのが抜けている」ということに気づかせてもらいました。

そのあとに、最初に学籍変更の制度を使うことになる、飯田亮瑠さんに会ったんですよ。飯田さんは「自分の性別は男性である」ということが非常に明確だったし、自分のなかでも受け入れていたし、早い段階でカミングアウトもしていた。すごく明確な意志をもって、授業中もとても強い目線で私を見ていたのね？教室のなかで、すごく強い目線を感じるんですよ。私が動く度にその目線がついてくるのね？こんなのそんなにならなから、「誰だろう？」ってこうして探したら、「ああ～」って…

一同：(笑)

田中：だから、話ができると思ったんですよ。私は概念として、「性別についての違和感がある」ということや、「性自認が違うことがある」ということは分かっていた。そういうことがあると知っていても、悲しいかな想像力がなくて、具体的にどんな困難にぶつかっているのかが、分からない。

ですから、飯田さんが授業のあとに来て話をするなかで、「本当に悔しいけど、自分は想像ができない。

だから具体的に、どういう困難があって、どんなところを変えてもらいたいと思っているのか、教えて欲しい」という風をお願いしたんですね。それを聞いてもいいぐらいに、自分のなかでしっかりと確立したものがあつた方でした。

そのときに飯田さんは、「自分は男として人間関係を築いているけれども、大学のメールボックスには、自分の名前が“女子である”というのが見えるような名前が書いてある。そうすると、そこに行く度に、“お前は女だ”、“お前は女だ”、と言われていたような気がする。それに、そこでメールを取っている自分を見たら、友だちは“あの人の本名は〇〇”と判断する。そうやって、自分が男として築いてきた人間関係がズタズタに切り裂かれてしまう。キャンパスにいて、それが非常に辛い」ということを話してくれたんですね。

こうして困難なことを具体的に教えてもらうなかで、じゃあ、どんな対応ができるんだろうか、と考えると、それはもう非常に明確。飯田さんのなかには「自分は男だ」という思いが、明確に確立しているんじゃないですか。だから、「大学になにをして欲しいのか」っていったら、このキャンパスのなかで、「性別を変えること」「名前を変えること」。そうすれば、あらゆるところで“あなたは女だ”と言われるようなメッセージを受け取らなくてもいいから、男として、キャンパスのなかで生活ができる。…だからこれはもう本当に、人権問題ですよ。それぞれの学生個人の問題ではなく、シスジェンダーを前提とした男女二元論な社会構造が内包している、構造的な問題です。そういう結論に達したので、人権委員会で議論することにしたんです。

飯田さんの前にも少しずつ、ポツンポツンと、トランスジェンダーの学生さんから話を聞く機会はあったのね。飯田さんに会う前にそれがなかったら、私もどれくらい飯田さんと話しができたか、分からないですね。

加藤: かず子先生の準備性も高まっていたところに、「この人には聞いて大丈夫」という人が出てきてくれたからこそ、物事が進んだわけですね。

田中: そうですね。飯田さんはコメント用紙でもきちんと自分のことを説明してくれて。「自分はカミングアウトしても全然平気だけれども、でも、グループ発表で同じ班の、他の学生たちが戸惑うんじゃない

いか」って、カミングアウトされた側の学生のほうを心配していました。でもそのグループでもカミングアウトして、グループ発表のトピックをジェンダー・マイノリティ、トランスジェンダーにしてみましたけどね。

相原: 飯田さんは、その授業の中では、男性として皆さんに認識されていたんですか？

田中: 授業では、「男性でしょ」「女性でしょ」って性別で分けて講義するわけではないじゃない、みんな同じようにやっているわけだから。でも、無意識のうちに分けていたでしょうね。あと、学生にはオープンにされていなかったけど、その当時、出席名簿には全部性別がついていましたよね。

土屋: はい、そうでしたね。

田中: 性別と名前が載っている出席名簿が配られるわけじゃないですか。飯田さんは本当に明確にアイデンティティが確立していたから、いろいろなことを話して、教えてもらいましたね。だから目から鱗で、「ああ、そういうこと」「それはキツイなあ」って、キャンパスのことを知ることができましたね。キツイことと言えば、「セクシュアリティを考える会」に「OGです」と言って参加してくれた人がいました。その人はレズビアンで、社会学専攻だから私の授業もとっていたので、知っている人だったんだけど、「私の学生生活は4年間ずっと孤独だった」って言ったんですね。それを聞いて私は頭の中が真っ白になって、「なんとかしなきゃ、自分は本当になににも知らない」って思ったんだけど…飯田さんの場合を考えると、キャンパスで過ごしていると、誰もなににも言わないところでも、システムとして“お前は女だ”って、つきつけられているわけですね。誰かが悪意をもってやっている、というのではなくて、「当然だよ」というようなかたちで、つきつけられている。だから、この仕組みを変えない限りにおいては、この状況は改善されないと思いましたし、辛い時間を過ごしているんだな、って思って、私は胸が潰れる想いで、「これはもう絶対に人権委員会マターだ」と決意しました。そうして人権委員会で話し合ったときに、「学籍簿まで変える」ということに関して、大学行政側は腰が重かったんですよ。「学籍簿の記載は戸籍と同じ」

という方針でしたので、戸籍の変更以外で学籍簿を変えろということなど考えたこともなかったのです。例えば「結婚して戸籍上の名前が変わりました」と言うなら名前を変える、という手続きはあるけれど、戸籍は変更されていないのに、学籍簿の名前だけを変えるというのは、どうなのか、と。なので、「文部省（当時）に問い合わせてみます」ということで問い合わせてみたら、「それは大学でそれぞれ考えてください」って答えが返ってきて、「えー、考えていいんですか!？」って（笑）

相原：あ、そうなんだ。

田中：だから「“文部省が言うからできません”、というわけじゃないんだ」「変えていいんだ」ということになる、「えっ、大学で、えっ、本当に、変えていいんでしょうか!？」って、これからもう必死になって考えるわけですよ。

土屋：それは2003年の頃の話でしょうか、それとも、もうすこし前？

田中：2003年度の秋学期に、会議で決めたんですね。その冬学期に新しい学生証になって1学期間を過ごして卒業していきました。「大学でこの名前・この性別で生活をしてきた」という実績が認められて、卒業後に進学した専門学校でも、そのステータスが認められたそうです。

土屋：ああ、なるほど。

田中：性自認の部分については、「これは問題だ」とハッと気がついて、「当然」と私自身が思っているところがあり過ぎて、生活レベルでの難しさは本当に分かりませんでした。

これからトランスジェンダーの学生さんたちへの対応をどうしていくかを考えると、学生個々人の問題ではなくて、やっぱりこの仕組み、社会構造的なところをしっかりと見ていかなければならない。個別対応でそれぞれに済ますことはできないものに、私たちは直面しているんだ、という風に考えますけれども。

加藤：そうですね。

これまでの流れをプロットして思ってたんです

が、CGSも、かず子先生のオフィスが学生のたまり場になっていた頃も、中心的に関わっていた学生さんの中に、ゲイの方は少なくないんですよ。でも、学内で物事が大きく動いてかたちになったものって、実はトランスジェンダーの部分が多い。決してゲイの学生が困っていないわけではないし、セクハラ規程に性的指向のことが載っていたりはずるけれども、学生の声でなにかが動いたぞ、という感触があるかという、必ずしもそういう感じを受けないところがありました。

それがどうしてなのか、と、考えてみると、トランスジェンダーの 이슈のほう、またはその 이슈のほうこそが、本当に大変すぎるからこそ、どうにかしなければそもそも生きられないくらい、とにかくキツイんじゃないか。それこそかず子先生がおっしゃっていたように、ゲイの僕も想像がつかないような、キツさの在り方や位相の違いがあるんじゃないか、というようなことも、思ったりしたんですよ。

田中：まあ、どちらがよりキツイのか、という比較はできないけれども、「男じゃなかったら女」「女じゃなかったら男」という男女二元論は、ものすごく根深いですよ。そのベースのうえに社会が成り立っているところがあるので、ここは本当に意識して見ないとならない。LGBの部分、性的指向の部分で言うと、男女二元論をベースに考えられるじゃないですか、LGも、Bも。もちろん実際には、Aセクシャルとかいろいろなバラエティがあるけれども、LGBで言えば、男女二元論のところには触れないで、「もっと多様な…」という風にして言うことができる。

でも、Tの部分は、男女二元論のところには触れちゃうわけですよ。「男 vs 女」という部分で、「いや、どちらでもないです」というような相談も、私は複数の学生たちから受けていました。「自分の戸籍は女だけれども、でも、自分は男か」というと、男じゃない。この社会のなかで、自分の居場所がない」って話していた学生が、私のところにバーッと走ってきて、「先生!インターネットで見つけたんですけど、Xジェンダー、っていうらしいですよ。私のような人たちがいるんです。そういうグループが見つかったんですよ」って言うのね? 1990年代の終わりくらいから2000年のはじめくらいで、まだ全然「Xジェンダー」って概念がポピュラーでもなんでもないときにね? だから、それだけ必死になるくらいに「自

分」というものをどう考えていくのか、ということ、「男じゃなくて、女じゃなくて、じゃあ、私は誰？」という、すごく難しいところに直面していました。なので、「どちらが大変か」のように比較するのは無理だけれど、トランスジェンダーについては、自分のなかでものすごく「ハッ」と気づかされたというか、大きな衝撃でしたよね。でもそこから、異性愛規範とシスジェンダー規範はつながっている、というところまで考えがいくのに、また時間がかかっているから、私のなかでも。「ココはココ」「ココはココ」みたいな感じで考えていたところがあって、「いや、これは全部通低している」というのが、実感をもって、ヒシヒシと自分の体感として考えることができるようになるまでに、またそれから時間がかかるんだもの。だから、まだね、「分かんないよねー」と思って。「分からない自分がいる」っていうのは、分かっているんです。

加藤: 分からないことが多くても、それをその都度、話にきてくれる学生さんと一緒に考えながらやってきた、というのが大きいんですね。その流れのなかで、最初の飯田さんのケースはかず子先生が担当されて、2件目からはもう手から離れていたんでしょうか？

田中: いえ、私が入権委員をやっているときには、毎年1件ずつありましたよ。

加藤: じゃあ、2003年度、2004年度、2005年度にそれぞれ1件ずつを担当された、と。入権委員会に審議事項として挙がってくるから、他の方が担当されたケースがあったかどうかは分かりますよね。

田中: そうですね、分かるはずですので、その頃のケースは全部私が担当した、ということになります。それから私は入権委員会を離れています。

土屋: 私は田中先生のあとに入権相談員をさせてもらったんですね。その頃はいと違って、入権相談員同士での情報共有がされていなかったの、他の相談員が実際にどのような相談を受けていたかは分からないですけど、入権委員会には、体育館の使用の問題とか学籍簿の変更とか、毎年ひとりはずケースとしてあがってきていたように思います。私の記憶では、入権委員会では、かず子先生が随分

苦労して下さったおかげかもしれないですけど、「こういう申し出があって、このように対応しました」というのが自然に報告されていたんですね。だから今日、歴史をうかがって、「ああ、そういう産みの苦しみがあったのか」というのは初めて知ったんですけど…

田中: (笑)

近年のケース

加藤: いま、土屋先生のコメントに、相原さんもすごく「うん、うん」とうなずいてらっしゃいましたが、けれども。

相原: はい (笑)

加藤: 2005年までのかず子先生、そのあとに土屋先生が担当された頃からすると、相原さんはだいぶブランクがあったからの担当者というか、“新世代の担当者”と言ってもいいんじゃないか、っていう感じもしますが…

一同: (笑)

加藤: 実際に対応することになったときって、どんな感じでしたか？「ビックリした」とか、「なんだか分からないけど、とりあえず対応すればいいか」とかなのか、どういう心持ちで、どういう対応をしてらっしゃったのか、ということからまずお聞きしたいのですが…

相原: 最初、入権相談員になったときには、「ハラスメント関係の相談を多く受けるんだ」と思っていたんですが、私は結構早い段階で、1名の学生さんの学籍簿変更の手続きに立ち会うことになったんです。そのときは、当人も入権相談員だった職員の稲田聡さんと一緒に対応しました。稲田さんはもう何度か経験されていましたが、やっぱり私たちもすごく知識不足・経験不足なところもあるので、あまり深く考えたりすることもなく、本当に自動的に、「入権相談員の仕事はここまでで、教務に情報がいつて、教務がこうして、そのあと入権委員会にあがって…」みたいな、そういう流れだけを聞いて、そのまま対応したんですね。

今日、田中先生のお話を聞いてすごくホッとしたん

ですけども、私も人権相談員をやって1年目の途中の段階で、「人権相談のお仕事のなかでこれが一番難しい」というか、「もう一番分からない」という意識が強かったです。布柴先生もご記憶にあるかもしれませんが、苫米地先生（元ICUカウンセリングセンター長の苫米地憲昭先生）が講師になってくださった研修会があったんですけども、「どこが一番ひっかかりがあるか」というワークのなかで、私は「GIDの学生の名称変更や性別変更が一番苦手というか、もう私には無理です」という相談をしたんですね。そのときに苫米地先生は「いいじゃない別に、普通に扱えば」と。「分からないことは“分からない”って本人に聞いてみなさい。“悪気があるとかそうではなくて、私は分きたいから教えてください”という気持ちで、やってみなさい」みたいなことをおっしゃってくださって。

その研修会の直後に新しい相談を担当することになったときには、最初に対応した学生さんとも顔見知りになっていたの、その2名の学生さんとは廊下で話したりとか、あるいは相談の場で話すときにも、それまでは決まりきった言葉でのやりとりだったんですけども、ちょっと様子を聞いてみたりとか、そんな機会がちょっとずつ増えていって、そのあたりからいろいろと分かり始めたというか、本当に私が想像できていないことがあって、それは、分かってくると本当にすごく大きな問題で、「ああ、こんなに大変なんだ」というか、普通にみんながやってきていることができない。そして、私たちがまったく気にもとめていないところで苦労したり傷ついたりしているんだな、ということが分かってきて。

特に、私にとって一番大きかったのは、2人目に対応した、FtMの学生さんとの出会いでした。その方はもう週1ペースくらいで大学の対応に文句を言いに来ていまして、それを聞きながら私が「人権相談にするんだったら、相談員2名で聞かなきゃいけないんだけど…」って言うと、「いいんです、相談したところで、どうせ同じようなことが繰り返されるんだから、いいんです！」みたいな感じで。でも、「この間の件は、こうなりました」という報告にもきてくれるんですよ。そういうときに「人権相談制度も、もっと宣伝したほうがいいですよ」とか「こんなじゃダメですよ」とか、いろいろダメだしもされて（笑）、すごくいろいろと、本当に肌身を持って学ばせて頂くなかで、その方がどんどん男らしくなっていくのを見て「ああー」と思ったり… また、

最初に担当させて頂いた学生さんは、女性の名前に変更された方だったんですが、その方が留学に行くという相談を聞く間にも、どんどん女性らしくなっていくのを「ああー」という思いで見ながら、「すごいねえ」と話したり… そんな風になっている感じでした。

そのあとですかね、CGSの加藤さんとのつながりができて、学生さんのことも含めた情報交換とか、いろいろと教えて頂くなかで、こういったテーマもすごく身近なテーマになって、いまは本当に、そういう相談がきても前みたいに「えっ」という感じではなくて、「ああ、またひとり、そういう方が相談に来てくれてよかったな」という思いで出会えるようになったので、すごく感謝しています。

加藤：いまお話をお聞きして面白く思うのは、対応を担当する最初の段階で学籍簿変更ができるシステムがあるから「対応できるじゃん」「楽じゃん」ってなりそうなものだけでも、システムがあるだけでは、相原さんが感じられた難しさや苦手意識みたいなものは全然解決されていない、というところですね。むしろそのシステムを一旦脇に置いて、人と人として関わり合う、ということ始めて、やっとうまくいくようになるというか、システムを無視することが、かえってシステムを更にうまく回すことに還っていく、というような感じがあったんだな、というのは、とても興味深いです。

相原：あと、対応にあたっている教職員はそれぞれ違う部署にいて、自分のやるべきことは分かっているんですけども、自分が対応したあとに誰がなにをどうするのか、どういう仕組みになっているのが分からなくて。例えば、私は教務課が出していると思っていた書類が、教務で探してもらっても見つからなくて、「うちの担当じゃないんじゃない？」って言われて。人権委員会の元事務局だった方にお尋ねしたら、「ああ、その書類は事務局で出していた“気がする”」みたいな感じで… なので、お互いがなんのために、なにをどのタイミングでやっているのか、ということは、関係する部署の間でも理解されていなかったんですね。

なので、布柴先生とも話していたんですが、対応のフローチャートみたいなものを作りたいと思っています。「誰がなにをするか。その部署の、その担当の人が行くことが、なぜ必要なのか」というフロー

を、関係する部署で話を整理したいんです。こうやってひとつモデルを作っておくと、逆に、特例的なケースや、これまで以上に考えてあげなければいけないケースでは、どこかのプロセスを飛ばしたりとか、もうひとつクッションをおいたりする必要も絶対に出てくると思うんですけど、そういった対応もしやすくなると思って。人権委員会も、教務課も協力をしてくれると言っているの、早い段階でやりたいと考えています。

加藤:ぜひぜひ。そういうのはすごく重要ですから。

田中:重要!

加藤:どこになにを聞いたらいいのかが分からない、というのは、本当におっしゃるとおりだと思います。このあいだ他大の先生から、「ICUでは授業の出席簿に性別の記載はありますか?他の書類ではどうですか?」ということをお問い合わせ頂きました。出席簿には性別欄がない、というのは知っていましたが、学籍簿変更が始まったときに、不要な書類からは性別欄が一掃された、ということは聞いていたんですが、じゃあ、どの書類が性別欄が必要とみなされ、どの書類は不要だとみなされているのか、という、実際の情報が分からない。なので、いま、いろいろな部署に聞いているところなんです。教務課に設置されている証明書自動発行機で出力できる書類に始まり、クリニック、就職相談グループなど、思いついた部署にヒヤリングをしています。この結果はとりまとめて、2014秋頃の「LGBT 学生生活ガイド」改訂時に掲載したいと思っています。

ちょっと話が脱線しましたね。学籍簿変更の対応についてはいろいろな部署に関係しているけれど、相原さんはご自身のこととして、人権相談員の対応する範囲について把握はしていたけれども、他はちょっとホワホワしているな、という状態なわけですよ。

相原:そうですね。相談員として必要書類を揃えて、あとはまあ、人権委員会頼みみたいな…(笑)委員会に投げてしまったあとは、なんらかの結論がでたら、どこかの部署が作った正式な書類が相談員に降りてきて、相談員が、「はい、この通りになりましたよ」って伝える、という…だから、本当に自分のところだけでしたね、最初分かっていたのは。そ

れでなんの疑問も、お恥ずかしいながら持っていなかったというか、「まあ、こういう趣旨の書類がどこかの部署から来ますので…共に待ちましょう」みたいな感じだったので(笑)

加藤:なるほど(笑)

LGBT 学生生活ガイド

加藤:さて、いまの話からすると、CGSが出した「LGBT 学生生活ガイド」は、多部署がおこなっている対応を学生さんからヒヤリングしてまとめたものですから、相談を担当された相原さんもあまり分からなかった部分を補うものとしても位置づけられるものだと思います。このガイドを作ろうと思った経緯とか、そのときに大変だったこととかを、編集した上田さんから聞きたいんですが…

上田:もともと、「ICUには学籍簿変更をできるシステムがある」とか、「健康診断で個別対応してもらえらしい」というのは聞いていたんですが、使い勝手がよくない状況だと思ったんです。いろいろな対応の情報自体は、口づてというか、噂みたいなかたちで広まっているけど、対応が本当にしてもらえるかどうかは、結局は自分で問い合わせないとならない。もしも問い合わせたときに窓口が間違っていたら、電話で回されたりして、その都度、自分で自分のことを何度も説明をしなくちゃならない。折角いいシステムがあるのに、実際に「変えよう!」ってなると、いろいろな人に対して、自分のことについて事細かに話さなきゃいけない、という大きなプレッシャーがある、ということも思ったんですね。じゃあ、ガイドブックみたいなかたちで、私たちが分かっている範囲でも情報をまとめて出したらいいんじゃないか。ガイドがあるだけでも、大学全体にも「こういうシステムが実はあるんだよ」というのを知ってもらえるし、これを読むことで、学生さんももっと問い合わせをしやすくなるかもしれない。だから作ったほうがいいよね、という話になったんですよ。

作るにあたっては、やっぱり私も分からないことがあったので、まず、実際にこのシステムを使った学生さんたちと、対応にあたった先生がたにインタビューをしました。どういったシステムになっているのか、どういうステップを踏むのか、という話や、実際に学校生活のなかで困ること…例えば男女別

に分かれている体育の件だったり、更衣室の件だったり。体育のときに、着替える場所がない、という話も聞きました。あとは、男女に分かれているトイレがほとんどで、それ以外に多目的トイレもあるけれども、実際、休み時間にトイレに行くときにはどうしているのか、とか。

あと、いろいろな学生さんから話を聞いていると、「自分の戸籍上の性別と違う性別に変えたい、と思っているわけじゃないけれど、男女で分けられている現状には違和を感じている」方は、トランスジェンダーの学生さんに限らないですね。例えば、体育館の更衣室にはいまもまだカーテンがないんですけれども、「みんな女の子なんだし、別にカーテンがなくなっても着替えられるからいいじゃん」といった認識があるなかで、「でもやっぱり、カーテンって必要だよな」という話が、トランスジェンダー自認をしていない学生さんからも出てくるんです。「みんなの前で裸になるのがイヤだ」とか「みんなの前で着替えるのがイヤだ」という学生は、やっぱり多目的トイレで着替えていたりするんですね。そうやって、キャンパスのなかでの生き方、やり過ごし方を模索している。このような話も聞いていくと、「学校生活のなかで、ここのところが困難だ」ということに関して、だいたい共通したものが浮かび上がってきたんですね。

このガイドは「あったほうがいいな」と思って作ったんですけど、最初は「こんなのでいいのかなあ」という思いもあったんですね。「こんなベーシックな情報を集めただけでいいのかな」とか、「足りないんじゃないかな」「これ以外にもなにかできることがあるんじゃないかな」って思ったんだけど、「よかった」という反響が、他の大学の学生さんや先生からもあって。これを出すことによって、「知れてよかった」って言ってもらえたり、「こういうシステムでの対応をICUがしているなら、うちの大学でもできるんじゃないか」という話になったというのも聞いたりして。だから、これは出せてよかったなあ、と思います。

加藤：思いがけない好反響でしたよね。

上田：ですよね。だから、ICUは学籍簿変更のシステムがあるということ自体がすごいなあ、というのは、改めて思いました。でも、こんなシステムが埋もれているのはもったいない、という思いもやっぱり

りあって。このガイドを制作しているときに、さっきからも何度か話に出ていますけど、私たちが学生対応の流れがいまいち分からなくて。トイレの場合は管財グループに聞いてひとつひとつ調べて、体育実技に関しては保健体育科の先生に話を聞きにいったりしたんですけれども、学籍簿変更のプロセスは？ってなると、はっきりしないんですね。すごく分からなくて、でも、学生さんに聞こうと思っても、プライベートなところにも踏み込んでいってしまいそうなので、どこまで聞いていいのかも分からない。けど、やっぱりいろんな部署が絡んでいるらしい、って話になっていくと、CGSだけじゃ取材しきれない問題になってくるし…

田中：一応ね？プロセスとしては、

人権相談員2名が相談にのり、人権委員会に報告をあげる。

→人権委員会で検討してOKがでたら、「性別と名前をこういう風に変更したい」という希望を用紙に書いて、幹部会にあげる。

→幹部会で承認されたら、希望が書かれた用紙に承認の印がついて、公的な書類になる。

→この書類が、今度は教務にあって、学籍簿変更の手続きがとられる。

で、この公的な書類を使って、卒業したあとに「学籍簿と戸籍が違う、齟齬があるじゃないか」って言われたときには、「こういう風にして、大学のほうから認められました」ということを自分で責任をもって説明しなきゃいけないんですよ。あと、学籍簿は1回変えたら変えることはできないんです。こういうことを全部、初めの相談のときに説明して、「これでもいいですか？」ということを確認しているんですね。

だから、学籍簿変更のプロセス自体は、そんなに難しいものでもないんです。これがみんなにシェアされているべきだと思うんですけどね。

加藤：いま現在、人権委員会のホームページを見ると、「性別違和を覚える学生の学籍簿における氏名・性別変更の手続きに関しては、人権相談員に相談してください」という一文があるだけなんです。じゃあ相談した先でどうなるのか、というようなことが、文面では全然伝わってこないんですね。

田中：どうなるのか分からないと、怖いよねえ。

で、私は最初るとき、当時の事務局長にお話をして、「ICUにはこういう仕組みがあります、ということ、公的に提示して欲しい」って言ったら、「あの…それはちょっと、しばらくやめて欲しいです」って言われて。

上田：なんで!?

田中：「まず、個々のケースに対応するプロセスを経験していく時間が必要です」とか、「他の大学はやっていないことなので、どうなるか分かりません。こういうような仕組みがあります、なんていうことをパブリックに言ったら、もう取り消しができません。だから、パブリックには言わないでください。こういうケースがあったら、それに対しては個別に対応していくということで、勘弁してください」ということを言われたんですよ。

そのときは、「大学というのは、そういうものなのかなあ」と思ったんですけど、最初のケースから10年以上経ったわけじゃないですか。しかも、それでうまくやってきているわけでしょ?だから、「パブリサイズしてきちんと提示していくこと、不安感を払拭していくことが必要なんじゃないか」ということや、「これまでは精神科医の診断書が必要、ということになっていたけど、この点はもう少し検討するべきじゃないか」とか、そういう議論をしたうえで、パブリックなかたちで「ICUにはこういう制度、仕組みがあります」って言う必要があるんじゃないかなって思うんですけど。もう、10年間の経験を積み、特段の問題はなかったし、この仕組みでいいし、この方向でいい。キャンパスとしてコンセンサスをもって、こういうことをしますという、表明をしてもいいと思うんですよ、大学として。

相原：もう件数としても、ニーズとしても、かなりありますよね。ケースとして本当に多いし、私に対応した学生さんのなかには「こういう制度があるから、ICUに来た」って言いきる学生さんもいますので、やっぱりこのシステムの存在は大きいと思うんですよ。

学生さんのなかには、「大学から本当に自分に正直に生きたい」「ここをスタート地点にしたい」って思っている方々も多いです。あと、大学生の間に20歳を迎える方も多いわけですけど、その時

点で、何らかの変化を自分の人生で迎えたって強く思いながら、ハタチを迎える日を待っている方々も、やっぱり多いじゃないですか。

そうすると、「大学が性自認のこを受け入れるか受け入れないか」というのは、大学を選ぶ際のポイントとなって当然だと思いますね。

田中：学生さんにとっては、当然そうだと思います。ICUが大学として、自分たちのスタンスをちゃんと示すことが必要。「こういう仕組みがありますよー」というだけじゃなくて、「ICUはこういうスタンスです」というのを、ちゃんと言うべき!! …と、私は思うんですよ。

布柴：それと同時にですね、いま、例えば体育館の更衣室だとか、はどうなっているんですたっけ?直ってないですよ?

上田：変わってないですね。カーテンとかもついていないです。

布柴：だから、やっぱり「スタンスです」と言うからには、設備も変えていかないといかん。僕、他の先生と一度そういう話をしたことがあるんだけど、「その…なにせお金がかかるから」って言われて(笑)「いや、意識を変えるのはものすごく大変だけど、お金をかけて変わるなら、軽いもんじゃないですか!!」って言ったことがあるんですけど(笑)あの、そこんところですよ。うん。

上田：せめて、カーテンをつけるだけで、いいんだよ?っていう…

加藤：「全員分の更衣室を個室にしろ」って言っているわけじゃなくて、「せめて、カーテンがふたつみつければいいんだ」という感じなんですよ。

土屋：ところで、ちょっと質問してもいいんですか?このガイド、好評だって言われましたよね。好評なのは学外からですか?

加藤：Twitterやfacebookなどでは、学外の方からも評判がすごくありました。

土屋：そうなのかなと思いました。

加藤：もちろん、学内からの反応もありました。

土屋：学内というのは学生？

加藤：はい。

土屋：そうですね。

加藤：先ほどこはず先生が、卒業した学生さんから「孤独だった」って言われて衝撃を受けた、というお話をされていましたが、このガイドが出てから、僕も似た経験をしました。ガイドが出た頃に4年生だった学生さんの話なんですけれども。

その方は、1年生の頃からちょくちょくCGSに来て、アルバイトもしてくれていた学生さんでした。「男性」の方で、髪を肩ぐらいまで伸ばしてらしたんですが、あまりトランスジェンダー的な印象を僕は受けてなかったんですね。「いわゆる“男らしさ”とかに対してはちょっとイヤだなんてことは思っていないのかな？」という感じで、性別違和が強い学生さん、という風には思っていないくて、来たら挨拶するぐらいの距離感だったんですけれども。

で、ガイドが出たときに「W3（その当時の学内portalサイト）でガイドを見ました」「あ、こういうのもあっていいんだ」、ということが、初めて分かりました」という話をしてくれて、そのときはそのぐらいの会話だったんですけど。その次にその学生さんがCGSに来たとき、初めてスカートをはいてきたんです。すごくシックできれいな深緑色のロング丈の、その方によく似合ったセンスのいいスカートで、すごく嬉しかったですよね。で、「そのスカート、すごくいい色だね、似合ってるね」って思わず褒めちゃったりしたんですけれど。それから、お化粧してくる日もあったり、スカート以外でもいわゆる女性らしい服を着てくるようになったりとかして、このガイドを出したことが、その学生さんの自己肯定につながったんだと思うんです。

でも同時に、本当に申し訳なかったなって思ったのは、自分自身、カミングアウトをしてくれるトランスジェンダーの友だちや後輩がいたお陰で、トランスジェンダーという在り方に慣れているつもりでいたんだけれども、やっぱりどこか、見た目とか雰囲気とか、そういうもので、人の在り方を勝手に判断していたし、「自分のことを言っているんだよ」「出していいんだよ」ということを、ちゃんと出せてい

なかったんだな、ということです。このことはいまでもすごく心残りで、申し訳なかったなあと思っているんですが、でも、学内の印刷室で刷ったような数枚の紙に過ぎないガイドであっても、これを見ることによって、「自分はこれでいいんだ」という風に思ってくれる学生さんがいたというのは、本当に大きかったです、自分の経験として。

上田：このガイド自体はCGSが考案しているけれども、制度として学校にある、というだけで、「あ、大学が認めているんだ」というところにつながるんじゃないかな、って思っています。

相原：そうですね。

上田：CGS自体、人によっては「あそこって、LGBT以外の人はいっちゃいけないでしょ」とか、「CGSに行ったら、自分のアイデンティティが周りにバレちゃうかもしれない」というかたちで、行き辛い場所になってしまっていることもあるんですね。学生のための場所としてオープンしていて、いまでもすごく居心地をよく感じている学生さんも、もちろんたくさんいるんですが、その反面、行きにくい、アクセスしにくい学生もいたりするんです。だから、CGSがガイドを出しているだけじゃなくて、大学がはっきりと言ってくれたら大きいんじゃないかな、ということも思うんですよね。

土屋：私が質問したのも、かず子先生がおっしゃった「大学のスタンスをはっきりさせる」ということにもつながるかもしれませんが、やっぱり教師のほうも、アドバイザーや授業を受けている学生さんのなかから、そういう学生さんと出会うんですよね。私、このガイドは教員にとっても、とても心強いものになると思ったんですよ。ただ、あまりまだ知られていないかな、って思うんですよね。

布柴：僕も、この座談会に呼ばれて初めて知った(笑)

一同：(笑)

土屋：なので、「好評なのは学外からですか？」と聞いたのはこういう意味なんですね。もっと大学内に明らかにできる方法があると、教師も助かるな、って思っています。

田中：これ、全学に配ったらどうですか？

上田：入学式のときには学生にチラシを配っていますし、学内の Portal サイトにもアップはしていますよね。

加藤：あとは、「学生の健康を考える会」で説明の機会を頂いたこともあります。

土屋：関心のある人は「学生の健康を考える会」でもなんでも参加しますが、そうじゃない場合は存在を知らないということがあるので、ちょっともったいない。もっとオープンにされる方法を見つけるといいのかなって思うんですよね。

田中：教授会で、5分くらい説明をして、「CGS に行ったら、もっと詳しい情報がありますよ」というようなかたちでアナウンスするとか、できたらいいですよね。

大学生生活全般をジェンダー・セクシュアリティから検証する

田中：今日の座談会で資料として配られていますけど、こちらは ICU の LGBT サークル「Sumposion」が 2007 年に大学に対して提出した要望書なんですけども、ここの中にもたくさんね？もういますぐにできることが書かれているんですよ。

布柴：そうそう、具体的にいろいろ… で、僕がこの要望書を見て、教えて欲しいなって思ったのは、どれかは、採用されたりしているんですか？っていうことなんですけれども。

加藤：じゃあ、要望書の最初から順に見ていってみましょうか。ちなみに、この要望書を出した Sumposion は、CGS に集まっている学生さんが中心になって作ったサークルなので、CGS と関係が深くはあります。ですが、この要望書自体は、学生さんたちが考えて提出したものです。

では、要望書を見ていきますね。「1. 学内設備上の問題点」の「1. シャワー」と「2. 更衣室」に関して、体育館セントラルロッカー棟とスポーツクラブハウスでは、僕は男子向けのほうしか確認できていないのですが、シャワーブースを仕切るカーテンはついていませんし、更衣室内にも、裸を見られないで済

むようなスペースは設置されていません。

布柴：変わってないんですね。

加藤：「3. トイレ」の部分では、誰でもトイレの表示が車イスマークになっているのを、「ユニバーサルトイレ」みたいなマークに変えて欲しい、ということは言ってきているんですが、それも変わっていないですね。

「4. 本館 1 階の学生用ロッカー」については、以前は本館に女子ロッカー・男子ロッカーというかたちであったのがなくなって、食堂の上の階に、性別に関係なく自由に使えるロッカーができましたね。

布柴：じゃあこれは OK、というか、なくなったわけですよね（笑）

加藤：本館のロッカー自体がなくなったけれども、まあ、ユニバーサルなロッカーが別の場所に新設された、と。

それで、「5. 寮」の部分に関しては…

布柴：男女に分かれていますよね。

加藤：分かれていますね。

布柴：新寮のトイレとか、シャワーに関しては…

加藤：新寮のシャワーに関しては、これとはまた別の要望書が提出された結果、いまのかたちになっています。いま見ているのは、最初に出した大学生生活全般に関する要望書なんです。寮の要望書は、こちらを一通りチェックしてから見てみましょう。

さて、「II. 学校制度上の問題点」に入ります。「1. 健康診断」ですが、健康診断の個別対応に関しては、周知の徹底の部分がまだまだであるように思います。「個別対応もできます」ということは書かれてはいるんですが、扱いがとても薄いです。あと、CGS の方から、「トランスジェンダーの学生さんは個別対応してもらえます」という情報をハッキリと出そうとすると、嫌がられてしまうんですね。実際に対応はしているので、そこは大丈夫だと思いますが…

上田：やっぱりネットで公言、となると…というの

があるみたいで。学生生活ガイドを発行する前後あたりで、一度お問い合わせをしたんですよね。で、健康診断のお知らせを portal とかにアップするときに「個別対応しています」、って文言を入れてください、というのをお願いにいったんですが、あまりいい感じには対応してもらえず… というのがありました。

加藤：「2. 大学文書の性別欄」については、さきほども言った通りですが、現在調べているところです。その結果をガイドに反映させて新版として出そうと思っています。新しい版になったときに、教授会などで配れたらいいのかな、と思っています。ただ、公式な書類から性別欄が消えていたとしても、例えばどこかの部署がおこなうアンケートには性別欄がある、というのはたまに見かけるので、そこはどうなのかな… というのはありますね。

布柴：それはもう「意識を周知させるしかない」というところにいっちゃうんですかね。「なんで必要なの？」という風に思うというよりは、「性別欄があることに違和感を感じない」って状態ですよね、元々は。

加藤：そうですね、それはあると思います。そして、「3. 学籍簿」について、学籍簿の変更制度についてですが、ここの周知も、さっきも言った通り、そこまで徹底されていませんね。まあ、周知するのを補助する意味も込めて、CGS でガイドを出した、というのもあるんですが…

布柴：「周知徹底のところちょっと甘い」という… まあ、「^{サンカク}△」みたいな感じですね（笑）

田中：「△」（笑）

加藤：「性同一性障害 大学」で google 検索をかけると、このガイドが出たときに取材をしてくれたネットニュースの記事が1位にあがってくるんですね（2014年5月20日時点）。だから実質、ICU のことが1位にあがってきます。「トランスジェンダー 大学」「トランスジェンダー 学籍」「性同一性障害 学籍簿」でも、10位以内に、学生ガイドのサイトが出てきます。あと、「セクシュアリティ 大学」「セクシャリティ 大学」でも、pGSS (program in

Gender and Sexuality Studies : ジェンダー・セクシュアリティ研究メジャー) のメジャー紹介が10位以内にあがってきますので、大学+セクシュアリティに類する言葉で検索をかけた場合、ICU が出てくる率が非常に高いんですが、出てくるのは CGS であることが多いんですよね、ICU 全学に関わる内容であったとしても。なので、お問い合わせがほぼ CGS に集中してしまっていて…

相原：そうですねー。

加藤：すごいときには、1時間おきにお問い合わせメールが飛び込んできたこともあります。他の大学や、そこで声をあげた学生さんのお役に立てるのはすごく嬉しいのですが、こういうお問い合わせが CGS に集中していていいものなのかしら、という疑問はちょっと感じるんですよね。

土屋：本当は大学ですよね。

田中：大学がね、スタンスをきちんと示す。

土屋：示せるといいと私は思います。

加藤：大学のホームページ (<http://www.icu.ac.jp/>) にも、基本的に書かれていないんですよね。この座談会のはじめにも触れた「国際基督教大学人権侵害防止対策基本方針」のところに、「性」や「性的指向」に関する記述はありますが…

相原：そうですね、ほんの一言ですよね。

加藤：なので一応、セクシュアリティに関する記載はありますが、例えばそこに「トランスジェンダーの学生さんは…」というコラムみたいな案内があるわけではないですし、大学の入学案内冊子にも、学籍簿変更に関する情報は載っていません。すこし話がズレますが、入学案内の担当部署に「授乳室の情報も掲載してください」とお願いしてみたことがあるんですが、「この冊子は受験生向けというか、高校生に対して出しているものなので、必要ないと思います」って言われて、「えー！」みたいな… 広報する必要性を取り合ってもらえてなくて。「ジェンダー・セクシュアリティへの対応が、大学のアピールポイントになるんだよ」ということ

が、CGSから他部署に伝えきれてないのかな、というのは、学生ガイドの学内周知が徹底できていない、ということも含めて、あるのかな、とは思いますが…

話を戻しまして、「4. 体育の授業」のところも、基本的には変わっていません。ただ保健体育科と関係を作っていくなかで最近よかったのは、2013年度から「保健理論」の授業内に、CGSが1コマ授業を持たせてもらえることになったんですね。「保健理論」は必修の授業なので、全学生に対して、ジェンダー・セクシュアリティの基礎知識を教える機会を最低1コマ、大学として担保できた、というのは、非常に大きいと思っています。ただ、自分が学部生だった頃の自戒もあるのですが（笑）、必修とはいえ学生にとっては受講モチベーションが低めの授業だとは思うんですね。このコラボレーションを継続するなかで、授業内容を改善して、どの学生さんにも関心をもって受講してもらえるように努力していきたいと思っていますが、他の授業枠でもこうした機会も設けられるようにしていきたいな、とも考えています。

次、「5. 入試バイトの男女別」というところに関して、過去は大学入試アルバイトの募集が、男女別でかけられていたんですが、この区分はなくなりました。「6. 卒業式のガウン」について、襟つきか否かで男女別があるのは、残念ながら変わっていません。学部生では、女性の学生さんの場合、ガウンに白い襟がつくんですね。白い襟だと、汗シミとかついたら大変そうですけども。

田中:これはねえ、襟を取るだけなんですけどねえ。

上田:クリーニング代もかからないし、取ってしまったほうがいい気がするんですけど。

田中:お金もなんにもかからない、意識だけ。女・男という風にして分けなくて、みんな同じにした方が、手がかからないでいいじゃない。

上田:ガウンを借りに行くと、レンタル会場には襟がついているガウンがかけてあって、院生は女性も男性もフードをつけることになるので、襟は取るんです。私の場合はICUで院生で修了したときだったので、「あなた院生ね？」って言って襟をとったガウンを渡されました。でも多分、学部生の男の子が

来たときには「あなた男の子ね」って言って取られるんだと思うんです。そういうことがその場で行われるんだろうな、ということのを思いました。

土屋:ああ、ついているものを取るんですね。

布柴:じゃあ全員、襟なしでいいわけだね。

相原:ねえ。全員襟なしにすればいいだけの話で。

加藤:または、全員が襟をつける、の二択ですよ。

上田:貸し出しのときに、男か女かというのを、どこを見て判断しているのかはよく分からないんですけど… 多分、名前を名簿でチェックされていたので、その名簿に男女の情報が載っているのかな、って思うんですよ。名簿自体を見ることはできませんでしたが、私たちが記入する書類に関しては、性別欄はなかったと思います。

加藤:教務課のほうでは、求められた場合には男女の記載のある名簿を渡しているらしいです。例えばクリニックから「健康診断が必要です」って言われたら、性別つきのデータを出しているらしくて。だから必要だというように、ガウンのレンタル担当部署が判断しているのであれば、性別記載がついている名簿が渡されている可能性はあります。

田中:なんか、ものすごいエネルギーを使っているような感じがするんですけど（笑）これなんかもう本当に、いますぐにできることですよ。

加藤:6卒からもできること、ですよ。

土屋:6卒から。そうですね、ガウンのレンタルはどこが担当なんですか？

田中:ぜひ調べて、布柴先生から提案して頂いて…

布柴:ちょっと聞いてみますね。

加藤:続けていきます。「7. 新入生向けオリエンテーションの男女別の実施」はなくなったのかな、最近そういう話は学生からは聞いていません。

「8. Enrollment Resultの公開」に関して、Enrollment

Result（教職員が見られる授業ごとの履修生名簿）からは、性別確認はもうできなくなっています。「Ⅲ. 学校生活上全般の問題点」のパートではいろいろな例が挙げられていますが、解決していません。例えばリトリートも男女別で宿泊フロアが組まれています。ですが、実はガイドのほうには載せていないんですが、トランスジェンダーの学生さんで、望むほうの性別のフロアで個室を用意してもらうことができました、という話も聞いたことがあります。ガイドを作る際、その学生さんにインタビューすることができなくて。取材がちゃんとできていなかったのが最初の版では載せないことにしよう、ということにしたのですが。

ともあれ、そんなこんなで、2007年に提出された要望書に掲載されているものでも、解決されていないものが多いです。

布柴：そうですね。

寮とジェンダー・セクシュアリティ

加藤：あと、こちらが寮の設計の図面が発表されたときに Sumposion が提出した、寮に関する要望書ですね（<http://lgbt.bit.blog6.fc2.com/blog-date-200906.html>）。

布柴：ああ、こっちが新寮を建てるときの要望書なんですわ。

加藤：そうなんです。最初の図面だと、例えば、お風呂は共同浴場だったんです。そういうのをやめて欲しいということで、要望を出して、当時の学生部長にもお話して、いまのタイプの、個別シャワーになったんですわ。

布柴：なるほどね。寮に関しては、2017年度のオープンに向けて、これから新々寮を2棟建てることになるので、どういう風にするかというのを、いまいろいろなところで意見聴取をしているところなんですわ。例えば、新寮に住んでいる学生もフロア長も、それから旧寮に住んでいる学生も、全員集まって、寮のいいところ・悪いところというのを、わーっと出してもらおう、ということもやっています。すると、ある子はこれがいいと言うし、また別の子はこれが悪いと言うわけですよ。

それで、あの一…… ベストなものを作るというのは、

コレ、不可能やな、って思うんですね。だから、バリエーションを明確にして、選択するというかたちにするしかないな、と。だとすれば、男子寮がいて人は男子寮にいけばいいし、女子寮がいて人は女子寮にいったらいいし、それらのなかに、選択肢として入れるというのはどうなのかな、ってというのはちょっと考えているんですけど。そうするのが適切なのかというのは、よく分からないんですけども。

この前思ったのは、これからそれぞれの大学もそういうことを明確にしていけないかと思うんですけども、例えば、「この大学はこういうことが学べますよ」ということを明確にしないと、なかなか選んでももらえない、ということが出てくる。で、寮に関しても同じで、善し悪しというのが人によって違うのであれば、やっぱり「こんなにバリエーションがありますよ。あなたはどこを選びますか？第一希望はどれですか、第二希望はどれですか？」って優先順位をつけてアプライをしていく。そういうかたちをもっと明確にするために、いま漠然と文章で書いてあったりはするんだけどよく分からない、というのがあるので、それぞれの寮のフロア長だったり、寮全体の会議とかで、「この寮のいいところ」というのをもっとPRしてもらって、「問題があるところ」というのはできるだけ解決していく方向で動かしていこうかな、と思っているんですね。

なので例えば、「お風呂が欲しい」という人もいるわけですよ。それで、どこやったかな、シャワールームの入口に扉がない新寮があつて…

上田：マジ!?

布柴：うん、ないんですよ。シャワールームは着替えたりシャワーを浴びたりするブースが3つあって、それぞれのブース自体は個別に仕切られているので、他の寮生に裸を見られる心配はない。けれども、シャワールームの大元の入口に扉がない寮があるんです。だから、廊下からのすきま風がブースに入ってきてちゃって、寒いらしいんです。

加藤：裸が見られないならよかったけど、それは知らなかったです…

布柴：それでね、三棟のうちのどっか一棟は最初に、試しに、っていったら変だけど、「こういう新しい

もの」というので先に建って。どこだったっけ…

相原：^{けやき} 櫛寮ですね。

布柴：櫛寮でしたっけ。で、残りふたつの寮は、櫛寮の問題点を変更したかたちで建てられたので、シャワールームに扉があるんですって。ところが、最初の櫛寮のシャワールームには、いまだに扉がない。で、要求は出しているのに、いっこうに前に進まない。

上田：なんで？

加藤：なんで!?

上田：なんで??

布柴：それでこのあいだ、僕と学生サービス部部長の岸本さんが二人で「なんで!?’’って（笑）「なんで扉ができないの!?’’って。

田中：不思議一。

布柴：担当部署には何年も前から希望を出しているのに、前に動かないっていうから、「ちょっと掛け合いに行きますか?’’って話していたんですけど、その、理由が分からない、ですよ。だって、扉1枚つけるのにいくらかかるのかな、っていう話で。

上田：これ、更衣室にカーテンがつけられていないのと一緒じゃないですか一。

布柴：そう、そうなんです。だから、ともかく…「寒いときに、担当の人に、櫛寮でシャワー浴びてもらえばいいんじゃない?’’とか言ってただけど（笑）[?] そういう問題点、住んでいる人にとっての問題点があって、なんとか解決できるものようなであれば解決をして、それぞれの寮のもっといいところをクローズアップして、それを選択してもら、というかたちにする方が、本当はいいんじゃないかなと思っていて。ファミリーレストランのメニューみたいなね、イラストなんかもいれたようなパンフレットもパーンと作って、それを高校生たちに見ても

らって、そこから入りたい寮をチョイスする。最終的には、希望者が多すぎたら、そのなかで選ばれる、みたいなことになるんだけど、そこはもうしょうがないので… そういう風にすると、「その人にとっていいもの」というところに近いところに、入れるんじゃないのかな、っていうような気は、しているんですよ。

田中：寮の問題だと、トランスジェンダーの学生が、寮に入れなかったんですよ。その辺に関しては、建物の構造を変えなくても、使い方・運用の仕方ですらでも対応できるので、そういった視点もきちんと中に入れていくというのも重要ですよ。

布柴：うん、うん。

個別対応の先に向かって

相原：先ほどこちらの要望書を見ていたときに、「個別対応をしています」というのを明記したくない、という部署のお話がありましたけども、私もついでのあいだまで学生サービス部にいましたので、そういう反応になるのがすごく分かるんですよ。

あの…「個別対応をします」と書いてあったとしても、いま現在できないんですよ。私は学生サービス部のときは、部長とすごく席が近かったので、寮に入りたい、という希望するトランスジェンダーの学生さんがくると、個人レベルでも「どう思う?’’「人権的にはどうなの?’’って相談されて、よくそんな話をしたんですけども。

例えば、いま現在、ハウジングオフィスや学生サービス部としては、「戸籍上女子なら女子寮には入れるけど、でもそれじゃあ、お気持ちはイヤなんですよ?’’でも、戸籍上も、見た目も女子なのに、男子寮には入れられないよ」と、「だからそうとしか言えないんだよ」と、言うしかない。そういうことの繰り返しなんですよ。

田中：だから、繰り返し同じことをやっている、っていうのは辛いでしょう?

相原：うんうん、そうなんですよ!

田中：だから解決する方向で、どういうことができるのかを考えて、もう問題なく対応ができているところもあるわけだから、そこから学んでいって、

2 この座談会を収録した2014年5月26日（月）の時点では扉がなかったが、その後改修工事が行われ、2014年8月6日（水）の段階では扉が設置された。

「じゃあ、寮のこのセクションは、LGBTフレンドリーなセクションにしましょう」とか…

相原：そうですね。

布柴：そうそう、そうそう。

田中：そういう対応ができるわけだから、希望があったところで「どうしよう」で止めないで、「どういう風に解決していったらいいんだろうか」ということで、人権委員会にもっていくとか、いろいろなところに持って行って、それをどういう風にしたらいいいのか、というところにかかないと… 同じ対応をしていると、苦しいですね。

相原：だからやっぱり「大学としてサポートします」ってなると、そういうところも考えやすくなると思うんですけども。

田中：そうですね、違いますよね。やっぱり大学のスタンスは大事ですね。

相原：そう思いますね。

布柴：あと、学生ガイドの方を見ていて思ったんですが、学籍簿の変更をした場合には、当然のことながら、健康診断とか、体育の実技とか、履修とかというの、全部くっついてくるわけですね、一般的には。

相原：そうですね、はい。

布柴：そうすると、もっと部署同士がリンクしていてもいいはずですよ。個別にいちいちいち、頼みにいかなアカンっていうのも、なんなのかな？という感じもするので。

田中：大学のなかで共通して、「教員も職員もこの問題について認識している」というようになっていないので、それぞれの部署のなかで、「じゃあこの場合は、このように対応しましょうね〜」ぐらいの声にしかならない、というのが問題なんですよ。

相原：そうですね。でもやっぱり、個人的に思うと

ころなんですけれども、ガイドを読んだり、話に聞いたりして「そういう学生さんがいるんだ」「困っているんだ」って知ると、実際にこういう方と出会って、本当に個人を知るとでは、全然違いますよね。こちらの認識度も違いますし、いろいろな問題点も本当に分かってくるので、あまりそういう機会が他の教職員の皆さんにないというのは、残念だなあって思います。

田中：でも例えば、LGBTって人口の5%くらい、20人にひとりはいらんだということを、教職員の間でしっかり認識させる。

布柴：そうですね、そうそうそうそう。

田中：そうしたら、「クラスのなかにひとり、ふたりはいる」っていうようなことなんですね。だから、分からないんだったら自分で調べなきゃいけないですよ。

例えば映画を観るとか、「R-Weekをやります」というときには、そこに積極的に、知らないから学びに行かなきゃいけない、知りに行かなきゃいけないんだ、ってならなきゃいけない。それを大学側がしっかりサポートする。「こっちの方向に行きます」ということで、「皆さん協力してやりましょうね」というメッセージを、繰り返し、繰り返し、繰り返し、出していく、ということだと思えますよね。

上田：学生や、サポートを必要としている人というのは、なにかサインがあれば、多分気がつくと思うんですね。「この大学、いいかもしれない」とか、「ここだったら、自分も過ごしやすいかもしれない」とか、読み取ると思うんです。あと、先生と直接話すときにも、「この先生だったら、ある程度自分のことを話せるかもしれない」とか、「この先生はちょっと無理だな」とかって判断を、ある程度できるわけですよ。

だから、学生がなにを求めているのかというのを、もうちょっと大学側が汲み取ってあげられること？「大学の管理的には難しいから、置いておこう」とか「やめよう」じゃなくて、「学生がどう生活しやすいのか」という視点で、もうちょっと学生の声聞いて欲しい。せっかく小規模の大学なんだから、できることがいっぱいあると思います。「学生のワガママだ」って言って片づけるんじゃなくて、汲み

取って欲しいな、って思っ。

田中：いや、ワガママどころか、学生はすごく我慢していますよねえ。

上田：そう！だから例えば、多目的トイレで着替えている学生さんがいるわけですけど、その方にしてみれば、「私はトイレで着替えられるから」「他の人に迷惑はかけられないから、私はここで着替えればいい」というスタンスなわけですよ。それに対して大学側、教職員も含めた構成員みんなは、「着替えはできているんだったら、それでいいよね」というかたちで済ますのではなく、「その生徒がどうやって生活しやすいか」ということを考えていかなきゃいけないんだよね、というのは強く思っていることなんです。

布柴：うん、うん。

田中：思いますよねえ。

上田：学生が過ごしやすい環境がどんなものなのかを考えたときに、LGBTに関わることだけでもこれだけ出ているわけですが、それらが解決することは、LGBT当事者じゃない学生にも、よく働くと思うんですよ。宗教的なこととかも含めて、「いろいろなサポートがあって、学生が生活しやすい大学」というのは、「学生みんなにとって生活しやすいところ」になるんじゃないかな、って思うんですけど。

土屋：どうやって構成員に周知していくか、という方法を見つけていくのは大切ですよ。人権委員会でもいろいろなセミナーを教職員向けにも開きますよね。でも、来ないんですよ。全然。

田中：だからやっぱり、こういうようなガイドを作ったら、教授会で知らせる。

土屋：教授会がいいですよ。

田中：学生対応もそうですけど、20人に1人はいるとすると、教職員にもLGBTのひとがいるって、考えたほうがいいですよ。でも、誰も出てこないというのは…

土屋：出せない、ということですよ。

田中：そうですね。やはり「セクシュアリティのことを出せない」というメッセージをこの大学が送っているということだから、「そういうメッセージを自分たちは送っているのか」ということに気づいて、それをどういう風に修正していったらいいのかということを、考えなきゃいけない。

土屋：20人に1人、というのは、統計的には明らかになっていることですか？

加藤：日本はまだ調査の蓄積が薄いんですが、世界のいろいろな調査では3～10%と言われてます。日本でもいくつかある調査では、3～7%くらいの数値が出ているので、10～20人に1人、というのは現実的な数字であると思います。

上田：統計は統計であって、数に載らない人もいるので、「最低でもこれだけいる」ということだと思います。

土屋：でも数というのは、私の専攻が数学だからというのもありますけど（笑）、結構インパクトがあって、「こういう人がたくさんいますよ」という言葉では分からないことも、「〇〇パーセントだ」というと「えっ!？」となる。それはすごく大きいですよ。

加藤：数字でいえば、2014年現在、ジェンダー・セクシュアリティが両方勉強できる大学って、日本ではICUだけなんです。なので、それを目当てにする人が集まりやすい環境ではあるわけですよ。また、こういう学生ガイドを出しているのもICUだけだと思いますので、もしかしたら5～10%よりも多いセクシュアル・マイノリティの学生が集まってくるのかもしれない。そういう環境要因もあり得る、とは思いますが。

ただ、他大学の方からは「ICUっていいですよ、すごくLGBTフレンドリーな大学で…」みたいなことを言われることがあるんですけど、僕はもう、言われるたびに「やめてください！」って、すごく拒否してしまう面があって。学生ではカミングアウトしている方がたくさんいても、教職員では、僕の知っている範囲では、会議などで「自分はゲイです」というようにカミングアウトしているのは、自分しか

いないです。なので、「この環境のどこがフレンドリーなんだ」というのは強く思うところで… ただ、他方で、「日本のどの大学よりもマシな環境だろう」とも、思っています。ただあくまでも「マシ」なだけであって、中心には男女二元論というのはやっぱりあるので、「マシ」な部分をもっと増やしていきたいと思いますね。

田中：ある先生にね、「自分の宗教的なバックグラウンドがあるから、受け入れられないんだ」って言われたことがあるんですね、一緒に人権委員会をやっているときに。「人権的に、差別をしちゃいけないというのは分かっているけれど、宗教的なバックグラウンドがある。いつかそれを克服したいけれども、いまはできない」という風に言われたんですね。だから、いろいろな人がいるとは思いますが、1割か2割の教職員が、だいたい「ああ、そうだよ」って共有したら、大分変わりますよね。

布柴：うん、力がありますよね。

田中：全員、というのは求めなくても、1割・2割で十分、次のステージにいけるような感じがします。1割・2割が変わると、放っておかれるようなことはない。ふふふ（笑）

加藤：いまのお話は分かる気がします。他の大学の教職員の方からくるお問い合わせって、だいたい孤立無援なんです。

布柴：ああ～。

加藤：仲間がいても、ひとりかふたり、他の教員が職員にいる程度、とか。規模が大きい大学では、学部や学科が異なるとお互いに手出しができなくなってしまう、といったこともあるみたいで、お話を聞かなかで「孤立無縁ですよ、大変ですよ…」ということもよくあって。なので、こうして座談会をセッティングすると関心のある方が集まってくださって、こういう風にディスカッションができるという、この「独りじゃない感」というのは、大学においてサポートする側の教職員の側でも、本当に重要だよ、というのは思いますね。

さて、だいぶお時間を頂戴しましたが、今回の座談会は、CGS Newsletter 17号にダイジェスト版を掲載するほか、CGS Online上で、PDFによるフルテキスト版も公開するようにしたいと思います。人権委員会のほうでまとめられるフローチャートなども一緒に公開できれば、とても嬉しいです。今日はお忙しいなかお集まりくださり、ありがとうございました。

収録：2014年5月26日（月）、ICU学内にて
構成：加藤悠二

この冊子に関するお問い合わせ先

国際基督教大学 ジェンダー研究センター（CGS）

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

国際基督教大学 第一教育研究棟 (ERB-1) 301

開室時間：11:00-17:00 (Mon-Fri)

Tel: 0422-33-3448

Fax: 0422-33-3789

e-mail: cgs@icu.ac.jp

※代表アドレス/返信は別のアドレスから送信される場合があります

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Twitter ID: icu_cgs

Facebook Page: icu.cgs

著作権は執筆者および当研究センターに所属し、著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

© 2014 by Center for Gender Studies All rights reserved. Except as permitted under the Copyright Law of Japan, no part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without the prior written permission of the publisher and author(s).



twitter ID: [icu_cgs](#)